

自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IX(3) —幼児期に自閉症と診断され、就学時診断が修正された例について—

肥 後 祥 治*・野 呂 文 行*・井 上 雅 彦*・加 藤 哲 文**・小 林 重 雄**

本報告の目的は、他機関において自閉症との診断を受けたが就学時の再診断において知能障害あるいは学習障害としての措置を受けたほうがよいと判断されたグループに関して高等学校相当時の様子を記述し、学校適応に影響を及ぼす要因を検討することである。調査は、対象児に対する心理テスト及び母親との面接によって構成された。

結果から次のことが明らかになった。①精神年齢は、中学3年時とほぼ同様な幾分上昇していた。②適応行動尺度で見ると各人とも1~4の領域での落込みを除いてほぼ彼らの測定知能水準、年齢、性別に相応の適応状態を示していた。③幼児期に完全に解決することができなかった問題行動は依然として残っていた。④学校適応に影響を与える要因として、状況の理解、教師=子供関係、余暇の利用方法、家庭訓練に対する親の姿勢などが挙げられた。

キー・ワード：自閉症児 追跡研究 学校適応 行動療法

I. はじめに

障害児のリハビリテーションの必要性が叫ばれる中で、これまで用いられてきたプログラムの有効性及び問題点を検討する作業は、盛んに行われてきたとは言いがたい。その一つの傍証として、就学前時に専門機関で治療教育を受けた障害児の長期に渡る追跡研究の数が、本邦において少ないことが挙げられる。われわれの研究室では、就学前に治療教育を受けた子どもたちの追跡研究を1979年に初めて報告した。それ以降報告は継続的に行われ、本研究で9報目となった。その間追跡対象の子どもたちは、児童期から青年期に到り現在では後期中等教育にあたる時期を終えそれぞれの道を歩んでいる。追跡が長期間に渡るにしたがい、治療教育プログラムの再検討・再開発のための資料収集といった当初の目的に加え、青年期における自閉性障

害児及び発達障害児の予後や彼らの青年期における問題の所在を明かにするといった新たな役割を担う必要がでてきた。

本研究は、近藤・高杉・伊藤・竹花・井口・小林・池・小林・長畑・斉藤(1979¹²⁾)の報告にはじまる一連の研究(太田・反保・金原・藤原・池・小林・長畑・斉藤(1979¹³⁾)；竹花・近藤・井口・長藤・古賀・柴・高杉・池・小林(1980¹⁴⁾)；伊藤・近藤・雨宮・竹花・加藤・久保田・松田・池・小林(1981³⁾)；伊藤・竹花・加藤・打越・竹花・高杉・近藤・池・小林(1983⁴⁾)；加藤・竹花・伊藤・打越・小林・竹花・高杉・平田・近藤・池・小林(1984⁵⁾)；加藤・高杉・打越・小林・浜田・前川・小林(1985⁶⁾)；福井・加藤・伊藤・小林・浜田・肥後・西尾・前川・小林(1986¹⁾)；肥後・加藤・藤田・小林(1988²⁾)の延長上に位置し、幼児期に他機関において「自閉症」と診断されたが、訓練の過程で自閉症状が消失あるいは改善し就学時の再診断で知能障害児、学習障害児として対処することが望まし

*心身障害学研究科

**心身障害学系

いと考えられた群(5名)に対して追跡研究を行うことを目的としている。特に今回は、後期中等教育の最終年度に達した対象児の様子について小学校6年時、中学校3年時の様子を踏まえながら報告し、この時期の学校適応の鍵となった要因を探ることをその主な目的とした。

II. 方法

1. 対象児

1978年4月の時点で、自閉的傾向を有し言語及び行動上の問題を有することを主訴としてT大学知能障害研究室で就学前指導を受けた子どもたちが16名存在した。彼らは、その処遇及び措置の観点から3つのグループに分けられた。本研究の対象児は、その中の1つのグループである。“幼児期に他機関において「自閉症」と診断されたが、就学時の再診断において知能障害児、学習障害児として対処することが望ましいと考えられた者”たちである。彼らのプロフィール、訓練経過、就学時の状況および進学先はTable 1に要約した通りである。イニシャルは近藤・高杉・伊藤・竹花・井口・小林・池・小林・長畑・斉藤(1979¹²⁾)にはじまる一連の研究(竹花・近藤・井口・長藤・古賀・柴・高杉・池・小林(1980¹⁴⁾)；伊藤・近藤・雨宮・竹花・加藤・久保田・松田・池・小林(1981⁹⁾)；伊藤・竹花・加藤・打越・竹花・高杉・近藤・池・小林(1983⁴⁾)；加藤・竹花・伊藤・打越・竹花・高杉・平田・近藤・池・小林(1984⁹⁾)；加藤・高杉・打越・小林・浜田・前川・小林(1985⁶⁾)；福井・加藤・伊藤・小林・浜田・肥後・西尾・前川・小林(1986¹¹⁾)；肥後・加藤・藤田・小林(1988²¹⁾)と共通なものを用いた。なお、K、YとM、Sは相手側の事情により今回の調査への協力を得られなかった。

2. 調査内容

調査は、標準化された市販の心理テストおよび面接法を用いて行われた。実施場所及び期日は筑波大学学校教育部において1989年8月末に実施された。また、事情によりこの期間に行えなかった対象児については後日家庭訪問を行

いその情報収集にあたった。用いた心理テストは、①田中ビネー1987年度版(以後、田中ビネー)、②グッドイナフ人物画知能検査(以後、DAM)、③適応行動尺度(ABS)の3つであった。また、面接は、資料1にしめす質問紙を中心に実施した。

III. 結果

1. 知能検査

田中ビネー、DAMの検査結果を小学校6年時、中学3年時の結果とともにTable 2に併記した。また、田中ビネー、DAMにおける精神年齢の推移をそれぞれFig. 1、Fig. 2に示した。田中ビネーで測定された精神年齢に関してT、M、Nは、中学3年時と同じであり、H、Tは漸増した。これとは逆に動作性の知能を反映するDAMにおいては、M、Nは精神年齢が漸増、T、Mは前回と同様の値、H、Tは急激な減少がみられた。

2. 適応行動尺度

T、M、N、H、Tの3名のABSの結果は、Fig. 3～Fig. 5に示す通りであった。またここに示してある評価点は、平均5、標準偏差2であり、この範囲にはいるものは、同年齢、同性、同測定知能レベル(MIL)において相応の適応を示しているといえることができる。

1) T、M

T、Mの第1部の特徴は、全ての領域において標準点5以上を示し中でも「経済的活動」、「数と時間」の2つの領域においては評点10というきわめて優れた状態であることである。第2部においては、概ね良好な適応状態であるが、「不快な言語的習慣」においては改善すべきターゲットが存在することが示唆されている。これ以外の評価点4以下の領域は、「暴力及び破壊的行動」、「自閉性」、「心理的障害」の3領域であった。

今回の結果を小学校6年時の結果と比較してみると第1部の領域で1標準偏差以上の改善を示したものが5領域あった。得点が下がったものは社会性の1領域であったが、1標準偏差以

Table 1 対象児の概要

	T・M	K・Y	M・S	M・N	H・T
性別	男子	男子	男子	女子	男子
生年月日	1971. 2	1971. 9	1972. 3	1971. 8	1971. 8
主訴	言葉の遅れ 落ち着きがない	言葉が少ない 落ち着きがない 仲間に入れない	言葉の遅れ 対人関係の障害	言葉がない 落ち着きがない 尖足歩行	言葉が出ない 落ち着きがない
初回面接	1976.9(4:9)	1976.4(4:7)	1977.5(5:2)	1975.6(3:10)	1977.4(5:8)
訓練期間	1年5か月	1年10か月	10か月	2年9か月	10か月
訓練内容	1976.9~1977.4 パズル、円柱さし、線引き。 1977.4~1978.2 発音、文字読み(個別)。サーキット、電車ごっこ、綱引き(小集団)。	1976.6~1978.3 書字、数概念、読み、絵画、(個別)。小集団学集。	1977.5~1978.3 言葉の学習(あいさつ語、助詞)、文字、文構成(個別)。	1975.6~1977.3 円柱さし、パズル、絵カードマッチング、発声・発語訓練、絵カードの命名、動作・音声模倣 1977.4~1978.3 色・形・大小弁別、記憶、トレーシング、音声と文字のマッチング。	1977.4~1978.2 発語訓練。 数概念。 トレーシング。
訓練終了時	ひらがな、数字の読み可能。 概念学習課題可能。 文字は書けない飽きたり要求が通らないと泣きや独語が出る。	他者との会話が可能。 課題への集中がよい。 行動、言語面で著しい進歩。	個別学習に集中して取り組むことが可能。基本的会話が可能。 助詞の欠落、疑問詞の理解ができない。	訓練中の着席可能。 絵カードの命名、音声・文字による絵カード弁別可能。トレーシングは不完全尖足歩行は改善されない。	単語によるいくつかの会話が可能。 基本的指示理解可能。 トレーシングは可能であるが描画はなぐりがき。
就学小学校期	小学校普通学級(介助員なし) 4年時より週3時間、ことばの教室へ通級。	小学校普通学級(担任に障害や就学前に指導を受けていたことを知らせていない)。	小学校普通学級週2時間情緒障害学級に通級。	小学校特殊学級部分的に普通学級へ参加。	小学校特殊学級部分的に普通学級へ参加。
中学校期	中学校特殊学級	私立中学校普通学級(同上)	中学校普通学級	中学校特殊学級	中学校特殊学級
後期中等教育期	公立養護学校高等部	私立高等学校普通学級	国立大附属高等学校	公立養護学校高等部	公立養護学校高等部
診断名	精神発達遅滞	微細脳機能障害	微細脳機能障害	精神発達遅滞	精神発達遅滞

Table 2 対象児の知能検査の結果

対象児	田中ビネー						D A M			
	'83		'86		'89		'86		'89	
	MA	IQ	MA	IQ	MA	IQ	MA	IQ	MA	IQ
T. M	6:06	50	6:08	43	6:08	36	5:07	36	5:07	35
M. N	2:01	17	3:04	22	3:04	18	3:06	23	4:04	27
H. T	3:03	26	5:02	34	5:08	31	6:04	42	4:04	27

(6:06 は6才6カ月のことを表す)

下の減少であった。第2部において得点が上昇した領域は存在せず、同得点が2領域、減少した領域が8領域あり、そのうち1標準偏差以上減少したものが4領域であった。

2) M. N

M. Nの第1部における特徴は、「社会性」(標準点4)を除く領域はすべて評価点8以上であることである。第2部も、「自傷行為」(評価点1)以外は評価点5~6の中に納まっている。

小学生6年時の評価点と比較すると第1部領域で上昇している領域は8領域で、そのうち1標準偏差以上増加しているものが7領域もある。減少している領域は2領域で「数と時間」「社会性」でありいずれも1標準偏差未満の減

少幅であった。第2部においては増加した領域はなく、同得点、5領域、減少領域が5領域であり1標準偏差以上減少した領域は、「自閉性」、「自傷行為」であった。

3) H. T

H. Tの第1部領域は、「家事」の領域が落ち込んでいるのを除けば良好な適応状態を示している。特に「言語」、「数と時間」は優れていることが明らかになった。第2部においては、「自閉性」の領域の落込みが目立つが他は良好な状態であった。

6年時との比較においては、第1部で2領域(「数と時間」「社会性」)、第2部で4領域(「常同的行動と風変りな癖」「適切でない対応の仕

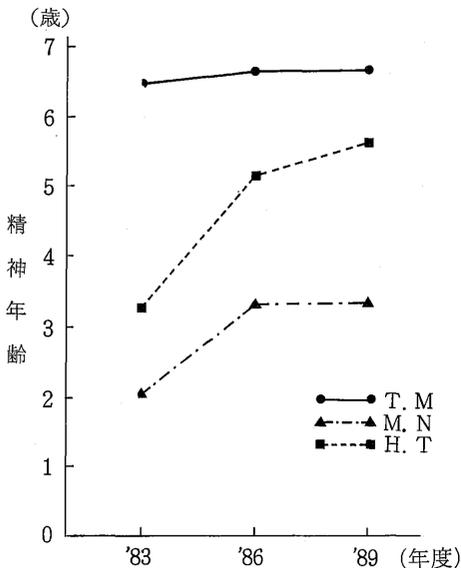


Fig. 1 精神年齢の推移 (田中ビネー)

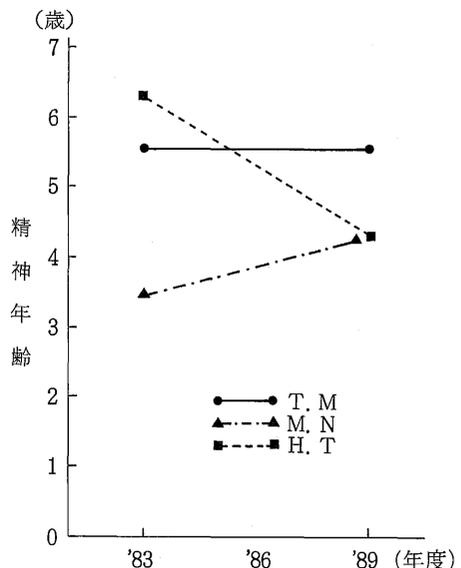


Fig. 2 精神年齢の推移 (人画知能検査)

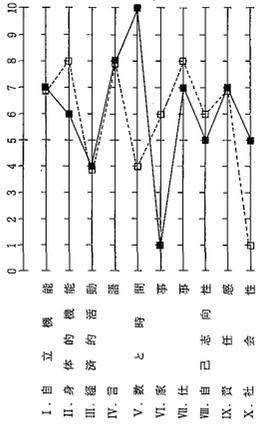


Fig. 5 H.T.のABSプロフィール

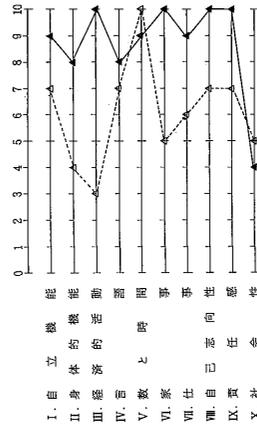


Fig. 4 M.N.のABSプロフィール

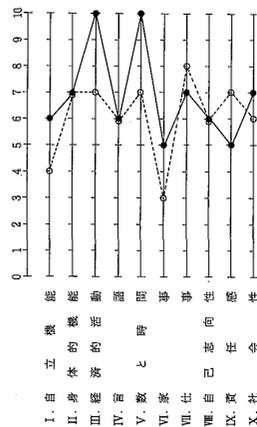
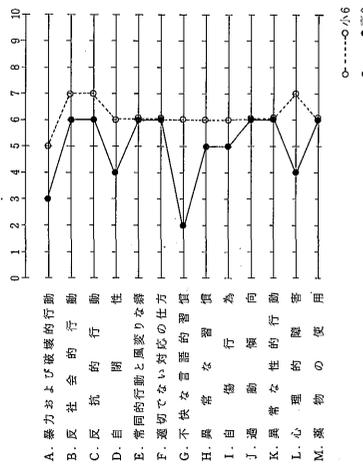
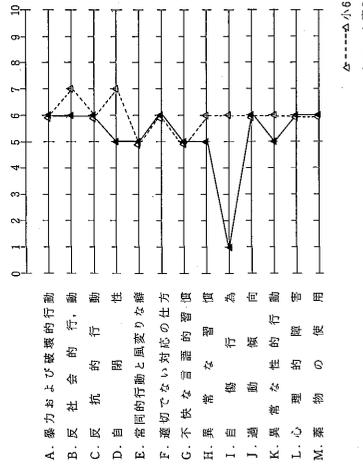
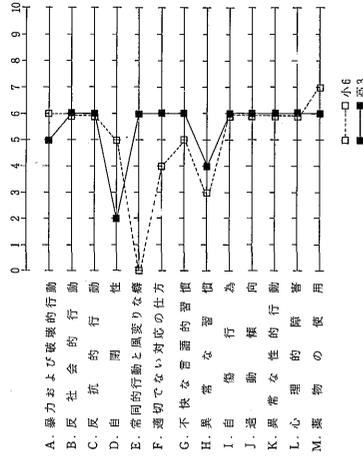


Fig. 3 T.M.のABSプロフィール



方)「不快な言語的習慣」「異常な習慣」)での評価点の増加が見られた。このうち1標準偏差以上の増加が見られたものが、各部で2領域ずつあった。減少した領域数は第1部、第2部それぞれ4領域と3領域であり、1標準偏差以上減少した領域は「身体的機能」「家事」「自閉性」であった。

3. 母親面接

1) T. M (養護学校高等部在籍)

中学校時代は特殊学級に在籍していたが卒業後は地元の公立養護学校高等部に進学した。1年時は、生活が変わって適応できない状態が出てきたが(母親は期待され過ぎたことが負担だったのではないかと考えていた)、2年時から落ち着いて過ごすことが可能となった。3年間持ち上がってくれた先生が存在し、その先生に子どもとじっくりつきあってもらったという思いを母親は持っている。担任の働きかけもあり、高等部在学時にライバル意識が育ってきた。そして2年生の時には、マラソン選手に選ばれるまでになった。本人もうれしかったのかそのことを繰り返し繰り返ししていた時期があった。母親は、対象児のことを高等部に進むことによって1つの目標に向かって努力する気持ちが養われてきたというふうに評価している。

対人面では、1年の時に仲良くしていた男友達はいたが行き来することはなかった。また女性を見てニコニコしたり関心を示すことはなかったが異性に対して何等かの接近を試みることはなかった。現在母親が問題点として残っていると考えているのは、独語とパニックのパターンが残っていることである。人が怒られているのを聞きながらパニック起こすことが、高等部3年時にもあった。家庭での、余暇はファミリーコンピュータ、ワープロを用いて過ごしたり、ノートに駅の名前を書いたりして過ごしていた。TVも好きであり特定の番組(仮面ライダー)や野球をよく見ていた。また、野球はテレビを見ている時にはルールをよく理解しているようだが、いざ自分でやるとなるとなかなかルールにしたがって動けないところもある。新

聞のテレビ欄は自分で確認し、テレビを見ることを楽しみにしている様子がみられる。さらに欲しいもの(ファミリーコンピュータのカセット、電車賃など)に対しては、これらを手に入れるために小遣いを貯金するなどの計画性がある。家事手伝いの面では、日常的には食事後の食器を下げるといった程度のことしかさせていない。ガスレンジの使用はできないが、ポットにお湯を入れておくとインスタントコーヒーを自分でいれて飲んでいる。買物に関しては、一品の買物なら行うことができるが多く品の品を一度に買ってくるような買物は頼めない。電話の対応は、知人に対してある程度できるが知らない人に対してはすぐ切ってしまったりする。進路については、就職させる前に生活訓練と職業訓練をかねてN県にある生活ホーム“Y舎”に2年間入所させる予定である。この生活ホームを選んだ背景には、母親自身が主催者の人柄や思想に同調したことが大きく影響している。コミュニティにおける母親の対社会的な働き掛けは、「心身障害児をもつ親の会(手をつなぐ親の会)」に加入し活動することで行われている。コミュニティにおいてどのようなサービスを期待しているのかとの質問に対しては、「(この子のことは)私がしょっていきしかないと考えている」という答えが返ってきた。

2) M. N (養護学校高等部在籍)

養護学校高等部に中学校特殊学級より進学。養護学校へは、電車で通学した。はじめの1週間は母親が付きっきりで行ったが、それ以降はその必要もなかったらしい。ただ同じ車両の同じ席に座ることへのこだわりがあり、たまたまそこに人が座っているとその人の膝に座ってしまう等の行動があった。学校の流れがわかるようになったのは、2年次になってからであった。健康状態はきわめてよく中学校からの6年間1度も学校を休まなかった。家に帰ってからの日課は、近くのスーパーに1人で買物に行くことがあり、曜日によって買うものは決まっていた。通常彼女は所持金の範囲内で買物をしてくるが、もし足りないようなことがあると月末に店

から母親に請求がくる。このシステムは、母親が自ら開拓した。買物代は、月に5万円になることもある。品物のレポーターもお菓子、雑誌、家庭用品と次第に広がっていった。しかし、お金をためてものを買うといったことはなく、お金の管理といった次元の行動は見られない。買物から帰ってきた後は、ポットに入れてある熱湯で一人お茶を入れて飲みながら、好きな雑誌を見たりしながら過ごす。また温かいものが好きで、ガスレンジを使って味噌汁を暖めたりお湯も自分で沸かすことができる。また、必ず買物で買った品を母親に紙に書いてもらい、それを自分でなぞると言う儀式的行動も持っている(本人は一人でも書く能力はある)。本児の自宅での仕事は、お風呂の掃除、自分の食器の後片付け、布団のあげおろし(まっすぐ敷くことへのこだわりあり)等である。余暇時間は、テレビのサスペンスものや歌番組を好んで見ている。問題行動の面においては、追跡研究初期のころから指摘されているW足歩行、パニック、自傷行動が残っている。対人面では全般的に人に関心が余りなくこの傾向は同性、異性に対しても同様である。母親の対社会的な接点は、養護学校の父兄会が主であったが事務会のようなものであまり盛んな活動は行われていなかった。コミュニティーで生活していくなかでどのようなサービスが受けられればよいと考えているかとの質問に「家庭をどうしても留守にしなければならぬ時預かってくれるところが欲しい、そういうところがないためそのような際病院に緊急入院ということをしなければならぬ。」との返事であった。卒業後は、区立の福祉作業所に通うことにしている。

3) H, T (養護学校高等部在籍)

中学校特殊学級卒業後、地域の養護学校高等部に進学した。1年の時はなかなか落ち着かなかつた。また先生と本児がうまくいかず、表情が暗かったという印象を母親は持っているようである。後のことはこれとって印象に残っていることはないということであった。家庭では身の回りのこと、家事の手伝い等については自

分でやる能力は持っているが何事に関しても母親が指示しないとやらない傾向にあった。ラーメンを作ったり、卵焼きを作るのは一人でやっているが、時間ができたからと言って好きなものを買いに行ったりすることはなく(自動販売機でジュース類を買う程度は一人でできる)、紙に車の名前等を書いて過ごすことが大半であった。また、欲しいものを買うために貯金したり、自分のお小遣いを管理するようなことはない。対人面では人を意識して動くことが少なく(同性、異性に対しても)、一人でいたがり、交替したりものを分けるといった行動は見られなかった。問題行動の点で母親が気になっている行動は現在ないとのことであった。母親の対社会的活動の主な舞台は、「心身障害児をもつ親の会(手をつなぐ親の会)」での活動である。どのようなサービスを受けたいと希望しているかとの質問には「親のいなくなった時のことが心配だ。」との返事が返ってきた。卒業後の就職は、現在捜してはいるが容易には見つからない状況である。手をつなぐ親の会で運営している福祉作業所で就職する可能性が高い。

V. 考 察

今回の調査においてはK, Y, M, Sの2名の協力を得られなかったため、T, M, M, N, H, Tの3名に対する調査から得られたデータをもとに考察を加えていく。

1. 対象児の適応状況

1) T, M

本児は、今回の追跡研究に協力してくれた3名の中でもっとも精神年齢の高い対象児であった。しかし、田中ビネー、DAMの結果を見ると精神発達は、ほぼ高原状態に達しつつあることが推測される。この傾向は、他の2名にも同様に見受けられることである。適応行動尺度で見ると生活全般にわたる自助スキルの面、問題行動の面の両面にわたり良好な適応状態であることがわかる。小学6年時と比較すると第1部においては全般的なスキルの獲得が行われていることが明らかとなった。問題行動の面では、特

に「暴力および破壊的行動」「自閉性」「不快な言語習慣」「心理的障害」の領域での落込みが目立つ。これらは、これまで周囲によってコントロールされていたことが、身体的な成長に伴いその制御が機能しなくなってきていることを示唆している可能性がある。本児は、高等部進学当初学校での不適応状況が続いたが、3年間持ち上がってくれた担任教師のじっくりつきあい、ライバル意識を育むという指導のもとで不適応状況を克服するに到った。

2) M, N

本児の田中ビネーの結果は、精神年齢が中学校3年時と同じであった。またDAMのデータは、中3の時点よりも漸増する結果となった。適応行動尺度の結果は「自傷行為」の領域を除く他領域は良好な状態を示しており、特に第1部の領域にその傾向がある。小学校6年時と比較しても第1部における標準点の増加は、驚くべきものがある。高等部進学後は、学校の生活の流れがわからずに不適応状態が続いたが2年になるころには学校の流れに慣れることができた。家庭では、中学校時代に訓練した買物スキルが功を奏して彼女の余暇の重要な部分を占るに到っている。

3) H, T

H, T児の知能検査の結果は、田中ビネーの精神年齢が漸増し、DAMの精神年齢がやや下がるといったものであった。本児の精神年齢が今後どうなっていくのか以後引き続き追っていく必要があると思われる。適応行動尺度において、「家事」「自閉性」の領域を除く他の領域はほぼ良好な状態であることを示している。他の2名が小学6年時の結果と比較すると、第1部領域において改善の傾向を示したのと異なり、本児はそれぞれに改善する領域と退行する領域を有していた。本児も他児同様高等部進学後の1年間はよい状況でなかったらしい。これは、2年に進級することで解消されている。1年時の不適応が、教師との関係に起因するものと考えれば教師—子供の間も学校適応の大きな要因であったといえるであろう。

2. 学校生活及び家庭生活に影響を及ぼす要因

1) 状況理解と子供—教師関係

今回の追跡調査に協力してくれた3名は、いずれも中学校特殊学級から養護学校高等部へ進学している。3名に共通して見いだされる記述は、1学年ででの学校への不適応傾向である。この傾向を形成する要因として、対象児の状況理解の能力と対象児—担任教師との関係が考えられる。いずれのケースもこの傾向から脱するのに2学年の進級（時間の経過、担任の入れ替わり）、担当教師の対応の変化ということがらが関与していると考えられる。その後は大きな問題をださずに学校生活を終了するに到った。T, Mにいたっては教師の働きかけもあり、他人との間の競争意識が育まれてきた。このことは、彼らの学校適応を考える上で特筆すべきことであろう。

2) 余暇の利用方法

M, Nは、3人の中で測定知能レベルが唯一最重度を示す対象児である。しかし、中学校期の後半に獲得された買物スキルは、現在では本児の帰宅後の生活の大きい部分を占め、彼女と社会との接点の1つを構成している。また、重度の子供の買物スキルを定着させていく方法論を考える上で本児の例は多くのことを示唆してくれるものと思われる。また、T, Mはファミコン、ワープロ、駅の名前書き等を、H, Tは好きな自動車の名前書きなどに時間をあてていた。この様に本人の好きなものあるいは長時間従事できるものがあることは彼らが日常生活を行う上で重要なことである。母親面接からわれわれは、これらの自閉症を思わせる行動が親のサイドから見ると重要な問題行動との評価を与えられていないとの印象を受けた。しかし、これらの行動を有する子どもたちにとって、幼児期、児童期におけるこれらの非社会的な行動を社会的な行動にしていく取り組みは、後の生活、特に学齢期を終えてからの人生に潤いをもたらす鍵を握っているものと考えられる。これらのことは、上記のような行動を消去すべきだということではなく、社会的な反応系の形成がより豊かな生活

と切り離せないことを意味するものである。われわれは、青年期における対象児の生活を考える時極端な二者択一的な思考法に陥ることなく訓練方法の検討を行っていくべきであろう。

3) 精神年齢と家庭訓練に対する親の姿勢

測定知能水準で見てみると T、M は中度精神発達遅滞、H、T は重度精神発達遅滞、M、N は最重度精神発達遅滞である。しかし、M、N の生活空間の広がりや、家事への従事は M、T、H、T にも劣らずむしろ優れている部分さえあると言えよう。この背景には M、T、H、T が男子であることもかなり影響していると思われる。この2名は、母親の方が「男の子だから」、「任せておけないから」といって上記の課題をあまりやらせなかった経緯がある。M、N の方は、盗癖をなくすために買物の訓練をやり、家事の手伝いを積極的にさせることで家族の日常生活に取り入れる試みがなされてきた。これらのことは、精神年齢もさることながら家庭生活の中でどの様に子供を訓練し生活の中に巻き込むか、あるいは家族生活に参加させるかと言う問題意識の重要性を示唆しているものと思われる。

3. 就学前指導プログラムへの示唆

訓練終了時の状態と現時点での問題を比較しながら就学前指導プログラムの改善点について考えて行きたい。T、M の就学前の個別訓練の内容は、パズル、円柱さし、ボール投げ、線引き、紐通しの課題から単音の発音、文字読みへと移行した。終結時点で平仮名、数字の読みが可能になったが文字は書けない状態であった。また、要求が通らないと泣いたり独り言がでる等の問題行動があった。今回の調査の結果からは ABS より「不快な言語習慣」に関する問題、母親面接から不快な言語習慣(独言等)とパニックの問題が指摘された。

M、N の個別訓練の内容は、円柱さし、パズル、絵カードマッチング等の弁別訓練、発声発語訓練、動作の模倣訓練、記憶、トレーシング訓練などであった。訓練終了時には訓練中の着席が可能となり、絵カードの命名、音声・文字

による絵カードの弁別ができるようになった。トレーシングは不完全な状態であった。主訴の1つである W 足歩行は改善されることはなかった。現時点での行動上の問題点は、ABS の結果から「自傷行為」の領域に問題のあることが指摘され、母親側から自傷行動、パニック、W 足歩行が挙げられた。

H、T の個別訓練の内容は、発語訓練、数概念の獲得、トレーシング訓練などが中心に行われていた。訓練終了時には、単語によるいくつかの会話および基本的な指示理解が可能であった。トレーシングは可能となったが描画はなぐりがきになってしまう状態であった。ABS から示唆される現時点での問題点は、「自閉性」であったが、母親側からはこれといった行動上の問題点は提出されなかった。

これらのことから、就学前時に解決されていなかった問題行動(パニック、自傷行動、W 足歩行)は、青年期になっても残遺する傾向にあることが明らかになった。このことは、言語及び概念学習を中心とした就学前指導プログラムにおいても、より積極的な問題行動への対処が必要であったことを示唆している。言語及び概念学習の指導と並行して問題行動への対処を行う際には各種の方法があると考えられる。しかし、従来多用されてきた問題行動を維持している要因(強化因)を取り払うといった方法よりも一歩踏み込んで、その行動パターンを他の行動に変えていく方法(拮抗行動分化強化)や、行動パターンが生起する際の行動連鎖を崩していく方法を行った方が訓練を受ける子どもにとっても学習課題が明確となり、問題行動の再起・維持・悪化に歯止めをかけやすくなるものと思われる。

また、青年期になってくると非社会性における問題点よりも反社会性における問題点あるいは社会的に影響がある行動の方がより問題視されてくる傾向がある。しかし、このことは、幼児期における非社会性に対する介入の必要性を否定するものではない。確かに考察2の2)の「余暇の利用方法」のところでも少し触れたよ

うに、非社会性を意味する行動が必ずしもマイナスに作用するとは言い切れないことも事実である。非社会性がこのような評価を受ける背景には、対象児の生活環境の広がり、今後の進路の問題などがあつたことを考慮にいれなければならない。小林(1982⁸⁾)は、集団参加を積極参加、積極的不参加(パニック、多動等)、受身的参加(いわれた通りにしか動けない)、受身的不参加(常同行動への従事等)の4つに分類し、受身的不参加は積極的参加へ到ることはなく、集団場面への適応を画策するためには積極的不参加あるいは受身的参加の状態にすべきであると述べている。以上のことを考えると幼期における非社会性は、より豊かな社会生活を構築させるために標的行動としてその改善に向けた方略を検討していくべき問題であることが結論できるであろう。この様にライフサイクルの中で変わっていく問題行動の評価に適切に対応していくために治療教育に従事するものは、標準化された問題行動の評価表を用いて対処すべき問題行動を明確に把握しながら治療教育を進めていく必要性があろう。

4. 親のニーズから

今回の調査では、親にコミュニティーにおいてどのようなサービスを受けたいかといった質問を行った。これらへの返答は、現在の障害児・者およびその家族のおかれている状況を象徴するような内容であった。母親が「私がしょっていくしかない」と決意する背景には、入口があつて出口が明確でない障害児教育の現状、学齢期終了をもって迎え入れる行政窓口の変更による教育方針の不連続性といった問題等があるものと思われる。また、「親がいなくなった時のことが心配だ」という声は、近親者の自助努力をことさらに強調する福祉政策の基本姿勢への告発ともとれよう。今回の調査を最後に対象児たちは学校を離れて社会にでることになる。主な所轄省庁も文部省から厚生省、労働省と変わっていく。今後は、我々もこれらの変化にしたがつて教育という枠組みのみでなく社会福祉、社会参加といったより広い視野で彼らの予後および

適応問題を追跡検討していく必要があると思われる。

VI. 今後の課題

学校適応といった観点で継続されてきた一連の追跡研究も、その対象児たちの後期中等教育の終了を迎え大きな転換期を迎えることになる。彼らは、学校という枠を越えより社会とのつながりを深く持たざるを得ないポジションに身をおくことになった。障害者の社会適応を考える時、我々は「個人の社会への適応」といった観点および、「社会がこれまで異質なものとして扱ってきた障害者を社会は今後どの様に受け入れその社会観を変革していくのか」といった観点の両方からも現状を分析していく必要がある。これらのことを念頭におきながら今後の研究を継続していかなければならないであろう。

謝 辞

本研究の調査を実施するにあたり教育研究科の宗像克典氏並びに研究生の吉岡昭正氏の協力を得ました。記して感謝致します。

文 献

- 1) 福井ふみ子・加藤哲文・伊藤健次・小林万利子・浜田房子・肥後祥治・西尾明子・前川久男・小林重雄(1986): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VII(3)一幼児期に自閉症と診断され、後に修正された例について一。筑波大学心身障害学研究, 10(2), 97-106.
- 2) 肥後祥治・加藤哲文・藤田直子・小林重雄(1988): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VIII(3)一幼児期に自閉症と診断され、後に修正された例について一。筑波大学心身障害学研究, 12(2), 77-84.
- 3) 伊藤健治・近藤明子・雨宮 政・竹花正剛・加藤哲文・久保田米蔵・松田玲子・池 弘子・小林重雄(1981): 自閉症状を示した障

- 害児の学校適応に関する追跡研究Ⅲ(3)
—自閉症状の消失した障害児について—
筑波大学心身障害学研究, 5 (2), 29-42.
- 4) 伊藤健次・竹花正剛・加藤哲文・打越 実・
竹花裕子・高杉紀久子・近藤明子・池 弘
子・小林重雄 (1983) : 自閉症状を示した障
害児の学校適応に関する追跡研究Ⅳ(3)
—自閉症状の消失した障害児について—
筑波大学心身障害学研究, 7 (1), 49-58.
- 5) 加藤哲文・竹花正剛・伊藤健次・打越 実・
竹花裕子・高杉紀久子・平田菜穂美・近藤
明子・池 弘子・小林重雄 (1984) : 自閉症
状を示した障害児の学校適応に関する追跡
研究Ⅴ(3)—自閉症状の消失した障害児に
ついて— 筑波大学心身障害学研究, 8 (2),
49-56.
- 6) 加藤哲文・高杉紀久子・打越 実・小林万利
子・浜田房子・前川久男・小林重雄 (1985) :
自閉症状を示した障害児の学校適応に関す
る追跡研究Ⅴ(3)—自閉症状の消失した障
害児について— 筑波大学心身障害学研究,
9 (2), 123-132.
- 7) 小林重雄 (1980) : 自閉症—その治療教育シス
テム— 岩崎学術出版社.
- 8) 小林重雄編著 (1982) : 自閉症児の集団適応
—社会的自立をめざす治療教育— 学習研
究社.
- 9) 小林重雄・前川久男・大野裕史・加藤哲文・
園山繁樹・武蔵博文・平田幸宏・藤原義博
(1983) : 自閉性障害児の学校適応に関す
る追跡研究. 安田生命事業団研究助成論文
集, 19, 69-86.
- 10) 小林重雄・前川久男・杉山雅彦・大野裕史・
佐竹真次・加藤哲文・園山繁樹・中矢邦雄・
福井ふみ子・渡部慶子・渡部匡隆・石川
泰・肥後祥治・鈴木瑞哉 (1986) : 自閉性障
害児の学校適応に関する追跡研究 (第2
報). 安田生命事業団年報, 22 (1), 63-79.
- 11) 小林重雄・大野裕史・加藤哲文・渡部匡隆・
石川 泰・肥後祥治・野呂文行・小野昌彦・
木戸能理子・井上雅彦 (1989) : 自閉性障
害児の学校適応に関する追跡研究 (第3報).
安田生命事業団研究助成論文集, 25 (1), 35
-47.
- 12) 近藤明子・高杉紀久子・伊藤健次・竹花正剛・
井口裕子・小林 明・池 弘子・小林重雄・
長畑正道・斉藤義夫 (1979) : 自閉症状を示
した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅰ
(4)—自閉症状の消失した障害児について
— 筑波大学心身障害学研究, 3, 121-134.
- 13) 太田千鶴子・山根律子・反保真弓・金原たか
子・藤原義博・池 弘子・小林重雄・長畑
正道・斉藤義夫 (1979) : 自閉症状を示した
障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅰ(1)
—目的と評価法について— 筑波大学心身
障害学研究, 3, 89-100.
- 14) 竹花正剛・近藤明子・井口裕子・長藤 利・
古賀靖之・柴 勝代・高杉紀久子・池 弘
子・小林重雄 (1980) : 自閉症状を示した障
害児の学校適応に関する追跡研究Ⅱ(3)
—自閉症状の消失した障害児について—
筑波大学心身障害学研究, 4 (2), 63-81.
- 15) 富安芳和・村上英治・松田 惺・江見佳俊
(1973) : 適応行動尺度手引. 日本文化科
学社.
—1990.10.11.受稿, 1990.12.10.受理—

資料 1

青年期の対人関係および日常生活に関する質問紙

1. 身だしなみ (清潔さ)

- (1) 外出する際、日常の服装よりしつかりしたものを着ようと言う意思がある (はい・いいえ)
- (2) 入浴することを好む (はい・いいえ)
- (3) 外出する際、化粧を見る (はい・いいえ)
- (4) 髪の毛が整っていないとき髪を揺るあてるなどの習慣がある (はい・いいえ)
- (5) 髪型に関心がある (はい・いいえ)
- (6) 化粧品を使うことに関心がある (はい・いいえ)
- (7) 生理用品の袋始末ができる (女子のみ) (はい・いいえ)
- (8) シャツや下着がズボンやスカートから出ていることがしばしばある (はい・いいえ)
- (9) 爪の手入れをこまめに行う (はい・いいえ)
- (10) 自分の好みの服がある (はい・いいえ)

2. 食事作法

- (1) 箸が上手に使える (はい・いいえ)
- (2) ナイフ・フォークを器用に使う (はい・いいえ)
- (3) 外に食事に行った際、静かに過ごすことができる (はい・いいえ)
- (4) 食事の際、背筋を伸ばして食事をもって食することができる (はい・いいえ)
- (5) 食事中、お見舞をしたり席を立つたりする (はい・いいえ)
- (6) 食事中、物を入口に入れたまま話す (はい・いいえ)
- (7) 物を食べる速度が (速すぎ・遅すぎ) (はい・いいえ)
- (8) そしゃくする際に、一度一度口を開けないでそしゃくが行える (はい・いいえ)
- (9) ごはんをこぼさずに食べられる (はい・いいえ)
- (10) ひしをついて食事を取る (はい・いいえ)

3. 自励スキル

- A) 移動
- (1) 一人で学校や職場などに行ける (はい・いいえ)
- (2) 行き慣れたところなら乗り換えがあるとこでも電車やバスで一人で行ける (はい・いいえ)
- (3) 行きたいところへ行き方を聞いて一人で行くことができる (はい・いいえ)
- (4) 行きたいところへも家族の誰か必ず行きたがる (はい・いいえ)
- B) 衣服の着脱
- (5) 衣服が汚れたら自分で片付ける (はい・いいえ)
- (6) 脱いだ服を自分で片付ける (はい・いいえ)
- (7) きれいな好きである (はい・いいえ)
- (8) 気温の寒暖に合わせて衣服の着替えができる (はい・いいえ)
- (9) 自分で洋服を選んでいる (はい・いいえ)

C) 日常生活

- (1) 起床や就寝の時間がほぼ一定している (はい・いいえ)
- (2) 学校に行くことや、職場に行くことをいやがらない (はい・いいえ)
- (3) 決まった時間に食事を取る (はい・いいえ)
- (4) 言われなくても部屋の掃除をする (はい・いいえ)

4. 対人行動

- (5) 知らない人に対して異様な言いがたれしさがある (はい・いいえ)
- (6) 知らない人を異様に怒れる (はい・いいえ)
- (7) 全般的には人に対して無関心である (はい・いいえ)

(8) 人に物を贈ることができる (はい・いいえ)

- (9) 言い出したならなかなかに愛おしさを曲げない (はい・いいえ)
- (10) 突然慕い出すことがある (異性がわからぬ) (はい・いいえ)
- (11) 弱いものをいじめたりすることがある (はい・いいえ)
- (12) 他人に対して思いやりがある (具体的にどういった行動があるか) (はい・いいえ)

(13) 黙って自分の物以外を持ち出すことがある (はい・いいえ)

- (14) 電話の対応が適切である (はい・いいえ)
- (15) 目上の人に対して丁寧な言葉を使える (はい・いいえ)
- (16) 老人や子供に席を譲ることがある (はい・いいえ)
- (17) 男性に関心がある (どのような所であるか) (はい・いいえ)
- (18) 家族の者が大変な仕事をしていると、それを見て自分から手伝ったり、手伝いを申し入れる (はい・いいえ)
- (19) 異性への接近の仕方が不自然である (具体的に) (はい・いいえ)
- (20) 親として入前ややって欲しくない行動がある (具体的に) (はい・いいえ)

(21) 言葉以外の異性と一線にいたがったり、話をしたがる (はい・いいえ)

- (22) 来客に対して正しく挨拶ができる (はい・いいえ)
- (23) 集団行動を取らねばならぬとき、自だがつことが多い (はい・いいえ)
- (24) 集団行動を取るときはリーダーシップを取ることが多い (はい・いいえ)
- (25) 根本的には一人で行っている (はい・いいえ)

(26) 集団の中で活動しなければならぬときには周りに合わせる (はい・いいえ)

- (27) 挨拶がしつかりできる (はい・いいえ)
- (28) masturbation (裸体、場所、問題点) (はい・いいえ)
- (29) 弱いなをいじめたりすることがある (はい・いいえ)
- (30) 他人に対して思いやりがある (具体的にどういった行動があるか) (はい・いいえ)

5. 家事手伝い

- (31) 買物を頼むとは一人てこちらの要求を達成することができる (はい・いいえ)
- (32) 伝言や正確に伝えることができる (はい・いいえ)
- (33) 家庭で決まった仕事を任せている (具体的に) (はい・いいえ)
- (34) この他にどのような仕事をしてもらいたいと思えますか (はい・いいえ)

6. 趣味・余暇の過ごし方

- A) 趣味
- (35) 部屋には自分の好きな写真や小物が置いてある (はい・いいえ)
- (36) 本人がとて大切にしている物がある (具体的な物) (はい・いいえ)
- (37) テレビの番組を楽しみにしている (具体的な物) (はい・いいえ)
- (38) 趣味がある (具体的に) (はい・いいえ)

B) お小遣い及びその使用方法

- (39) 日常的な買物は一人で行く (はい・いいえ)
- (40) 貯金をする習慣がある (はい・いいえ)
- (41) 自分の欲しいものを手に入れるために計画的に貯金をする (はい・いいえ)
- (42) 欲しいものが本人の中で決まってお小遣いをもつて買ってしまう (はい・いいえ)
- (43) 与えられたお金の管理ができる (お小遣)

い程度 (はい・いいえ)

C) 余暇

- (44) 暇なとき好きな物を買に行ったりすることがある (はい・いいえ)
- (45) 自分の飲みたいとき、お湯を沸かしてお茶やコーヒーの準備ができる (はい・いいえ)

7. 学校生活

- (46) クラスでの役割 ()
- (47) 仲のよい友達は何人通っているか、どういう付き合い方をしているか ()
- (48) 本人の学校生活で印象的なこと ()
- 1年次 ()
- 2年次 ()
- 3年次 ()

8. コミュニティに於ける生活

- (49) どの様なサービス機関を利用しているか ()
- (50) どの様なサービスを希望しているか ()
- (51) 地域の人人々とはどのような関わりを持っているか本人及び御両親 ()

9. 今後の予定

現在の進路の決定過程

10. 熟慮状態

The Follow-up Studies on School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms IX(3)

**Shoji HIGO, Fumiyuki NORO, Masahiko INOUE,
Tetsubumi KATOH, and Shigeo KOBAYASHI**

Following up handicapped children who were trained in their infancy is one of the most important things to discuss their prognosis and effect of training. Five subjects whose autistic symptoms had been improved on the process of behavioral therapeutic approach during infancy in spite of diagnosis as Autism by other institutions were selected in this study. Psychological tests (Tanaka-Binet Intelligence Test, Good-enough's Draw-A-Man Test and Adaptive Behavior Scales) and interviews with their mother were administered to make clear their high school age's appearances.

The results were summarized as follows.

- (1) Their mental ages were in compatible with their junior high school age.
- (2) Judging from the results of Adaptive Behavior Scales, they adapted themselves in their special education school, respectively.
- (3) Their behavioral problems, panic, self-injurious behavior etc. had not been improved during their school age.
- (4) Level of school adjustment of handicapped children was due seemingly to ability of understanding the situation and enjoying their own leisure time and teacher-child relationship and parent's attitude for home task were also appeared to be important factors for their adjustment and prognosis.

Subjects have finished their school age. Consequently future follow-up studies should be analyzed by another points of view such as social welfare and so on.

Key Words : autistic children, follow-up study, school adjustment, behavior therapy